

社会学委員会  
災害・復興知の再審と社会的モニタリングの方法検討分科会  
(第25期・第12回)

議事要旨

日 時：令和5年8月30日（水） 14時00分～18時00分

形 式：オンライン会議

出席者：浅川達人（幹事）、青柳みどり（幹事）、岩井紀子、岩渕明、奥村弘、玉野和志、町村敬志、増田聡、

欠席者：池田恵子、吉原直樹（委員長）、島菌進、山下祐介（副委員長）、山川充夫

<議事>

(1) 前回議事要旨の確認

原案通り承認された。

(2) 本分科会からの「報告」について

令和5年7月15日付で「報告」を提出したことが報告された。

(3) 本分科会の活動の次期以降のあり方について

本分科会の時期の活動の方向性について議論された。

(4) その他

特になし

---

---

以下、議事録詳細版です。

(1) 前回分科会の議事録の確認

青柳：確認を完了した。

(2) 本分科会からの「報告」について

青柳：活動報告を提出した。

青柳：吉原委員長から、今後の本分科会について検討してほしいと言われている。岩井先生と玉野先生から、現在の状況について教えていただきたい。

玉野：新しい課題分科会について。察するに、各社会学委員会の分科会。佐藤先生が委員長で、各位委員会の活動について報告された。重要な点としては、分科会を存続させていくためには、きちんと準備する必要がある。最近の学術会議では、普遍性が重視されているため、単独の分野の人だけで構成されている分科会は存続が難しくなるだろう。テーマに応じて、必要な分野の人に参加してもらう必要がある。報告や見解の査読システムについては、いろいろ面倒なことが生じており、検討が必要である。委員長を全て会員にすべきだという意見もあるが、無理な話ではないか。

岩井：総会の場合でも、分科会の数（が多すぎる）、融合型（分野横断的にテーマを作る）が必要である、といったことが議論されている。査読過程において、他の分科会と話し合ったのかということが厳しく問われた。これについて総会においても、猛烈な反発が出た。幹事の方々も、今期は反省していると言っているが、来期はどうなるかわからない。査読体制をどう改良するかは、まだわからない。委員長を会員にすべきという意見も出たが、猛反発であった。会員の数は少ないし、専門分野をカバーできているわけでもないので、適切な連携会員が会長になる必要があるだろう。この分科会は吉原先生から青柳先生に諸々のことが振られており、その点に違和感を感じている人がいる。委員長・副委員長は実質的に事務局や第1部とやり取りする方をおいておかないと、問題視される場合があるだろう。分科会の数を減らそうという意見はある。ジェンダー関係については、第1部の中にも3つほどあるので、どうするかが話されている。「東日本」に関連しない災害が多発している現在、「東日本」以外の災害にも対応していく必要があるだろう。連携会員は総理大臣の認証は要らないので、内定の状況にある。

町村：我々の分科会からの「報告」について苦労した点・課題について教えてい

ただきたい。

岩井：『学術の動向』についてはシンポジウムの内容をそのまま掲載できた。今期になって、学術の動向の論文は個人の見解であり、「報告」は一個人の意見ではいけない、と言われた。本人であっても『学術の動向』に書いたものを報告に入れると剽窃とされる。分科会の中で話し合った内容として「報告」に書くべきだとされた。『学術の動向』は月刊から季刊となった。『学術の動向』についても、学術会議の学会誌ではない、別組織である、なのでそちらの意向として判型も変えたし、シンポジウムを2000字にまとめなさい、などといった制約がかかるようになった。したがって、『学術の動向』に書くことと「報告」の内容が重なるということは、この4月以降無くなった。

青柳：剽窃の指摘が一番しんどかった。『学術の動向』に書いて、それを「報告」に引用すると、個人の業績になるので良いと思ったが、それが裏目に出ってしまった。

### (3) 本分科会の活動の次期以降のあり方について

青柳：学問分野オリエンティドだったのが、イシューオリエンティドになるのだろうか。イシューはたくさんあるが、これをイシューオリエンティドにするのは難しいのでは。

岩井：アーカイブについて。こちらができてないと思っているイシューと、復興庁はやっていると思っているイシューがあるので、目標の中で、その差異をきちんと明示して書かなければならない。今回の「報告」についても、復興庁の報告書を見るようにと指摘された。

町村：この場の今日の議論としては、存続したいという意思表示を出すべきなのか。存続する場合に、どこまでいうのか。

青柳：そもそも社会学委員会の中にある必要があるか、も議論すべきだ。分野横断的な分科会をどこかに作るべきではないか。

岩井：町村先生に伺いたいですが、分野横断的な委員会を下から提案できるのか？そのようなシステムはあるのか？

町村：期が変わったところで、ゼロから立ち上げる原則となっている。次の期の方がどう考えるかのお膳立てをしておくだけ。第1部として考えていく上で、他の分野別委員会と話ができれば良いのでは。

岩井：社会学委員会だからといって、社会学のテーマである必要はない。いろいろな分野の方に関わってもらった方が良い。学術会議では、一つの分野でやるなら、学会で良い、と考えられている。次期に何かを立てるとすれば、内容と人選の準備をしないと難しいと思う。

町村：新しく連携会員になった方向けの説明会があるので、それまでにはお膳立てをしておく必要がある。

岩井：この分科会は役目を終えたということであれば、次のことを考えないという結論もありうる。

岩渕：復興12年経って、何を継続するかが問題。工業技術センターでも、復興支援が業務の第1位にある。知事が下さない限り、末端は降ろすことができない。店じまいができないままに、復興がなされていることが多い。防災を考えるのはあると思う。誰かがやらなければならない。復興庁も人が変わって、何も残っていない。科学リテラシーがなく、閾値という考え方が受け入れられず、ゼロでなければいけないと思われている。機械工学の中で復興への関心はない。技術を進めていくところでお金を取ろうとしている。科学技術が人間社会とどう関わるかを議論する場は、他にないのではないか。そこに存在価値を見出すべき。連携するということには、そこに関心をもつ人を出さないと進まない。何らかの形で是非継続してはどうか。誰をピックアップするかは、難しい。

増田：個人的には社会学委員会の下にあって良いと思う。自分自身は今期で終わり。

奥村：3年間参加した。阪神淡路は再来年30年になる。どのぐらいのスパンでモニタリングすべきか。社会をモニタリングしていくというときに、どこまで考えていく必要があるか。結構長い期間の社会の変化を見ることになる。東日本の場合は放射能の問題もあるので、長いレベルが必要になる。社会学が中核になるのは、悪いことではないのでは。

浅川：原発被災地では、住民の方々は「復興」を語ることをすらできないと言われている。津波被害とは復興のスパンが異なるので、長期的にモニタリングすることが必要だと思う。

岩井：岩渕先生、奥村先生と聞いていて、災害が社会とコミュニティに与える影響のモニタリングを長期的に行うことが必要かと感じた。

増田：今年の宮城ボイス9月2日は、関東大震災100年にちなみ、東日本の100年がテーマです。

玉野：社会学委員会の中の分科会と考えると、社会学を中核にして、さまざまな人をリクルートする必要があるだろう。「災害と社会」というように抽象的に考えるべきだろう。災害を社会の側がどう受け止めるのか、記憶し、次の世代に受け渡していくかがテーマとなるか。問題は誰が、そんな大変なことを引き受けてくれるのか。テーマと人脈的な蓄積はあるから、やることに困難は少ないのではないか。

岩井：特任連携会員の数も今は絞っている。今いる連携会員の中から探し出す必

要があるのでは。

町村：新しく連携会員になった方向けの説明会までに、整えられたら良い。復興庁の振り返りが公開されているが、課題が指摘されている。政府の政策を踏まえながらその課題を学術的に探求していくというように使えるのでは。

青柳：福祉関係の分科会の先生が関心を持っていただいた。福祉関係の方に入っていていただくのが良いのでは。

町村：説明会に間に合わせるために、分科会を幹事会に承認していただく必要がある。10月中は1回目の幹事会に間に合わないと承認されない。

岩井：10月2/3/4に総会がある。誰が主体となっていくかを決めておく必要がある。ここの委員長を引き受けるのは無理。

青柳：分科会立ち上げの前は、世話人が動かすのでは。

岩井：世話人は引き受ける。

青柳：世話人を岩井先生にやっていただいて。中身を考えるのは2・3人が担当するのはどうか。

岩井：10月中の幹事会の中で、決めるのでは。

玉野：佐藤先生の認識としては、社会学委員会の中は多いわけではないようだ。

町村：毎回名前を変えているので、継続と言わない方が良い。扱う 이슈 も変わる。連続性は大事。

青柳：災害が社会とコミュニティに与える影響に対する長期的モニタリングが必要である。これを次期に提案する。幹事役は継続。

町村：岩渕先生から人選の情報もいただけるとありがたい。

岩渕：探してみます。

青柳：災害が社会とコミュニティに与える影響に対する長期的モニタリングが必要である。これを次期に提案する。幹事役は継続。・・・これを結論としたい。